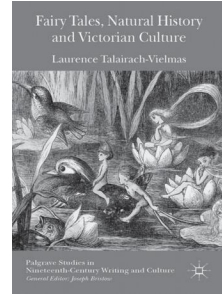


書 評

Laurence Talairach-Vielmas, *Fairy Tales, Natural History and Victorian Culture* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2014)



清水 友理

本書のキーワードは、表題の“Fairy Tales”と“Natural History”の2つである。この書評では、それぞれを「フェアリーテール」「博物学」と表記する。本書におけるフェアリーテールとは、いわゆる“童話”ではなく、物語の中に妖精や魔女、怪物といった超自然的な存在—“fairy” が登場する作品を指し、創作以外の民話や説話といった伝承文学も含む。本書が取り扱う 19 世紀後半はまさに、博物学が様々な領域に分化し自然史へ変化していく過渡期であったため、博物学と限定した訳を当てることには違和感があるかもしれないが、著者の探求の出発点が博物学にあったことを鑑み、このようにした。

ローレンス・タレイラシェヴィエルマは、本書において、ヴィクトリア朝文化における博物学とフェアリーテールの関係に焦点を当て、博物学の分野に対するフェアリーテールの影響、及びフェアリーテールに対する博物学の影響の相互的な読解を試みた。その目的は、科学と文学という双領域の相互作用の解明である。これは著者の専門分野にそのまま該当する。著者はこれまでも、*Wilkie Collins, Medicine and the Gothic* (2009) や、*Moulding the Female Body in Victorian Fairy Tales and Sensation Novels* (2007) などといった、科学と文学という双領域の関係をテーマにした著書を発表してきた。

本書の詳しい内容に入る前に、私の体験を述べるのを許していただきたい。私が本書を読んで最初に思い出したのは、初めて博物学の概念を理解したときのことであった。それは、大学院に入学した 2013 年に日本女子大学で開催された、第 53 回史学研究会大会での、草光俊雄先生の公開講

演「啓蒙主義、博物学、人種」である。この講演において先生は、博物学とは、16世紀以降のイギリスにおいて自然界の秩序を探究しようとする人々の間で定着した言葉であり、その背景にはルネサンス以降に登場した“自然の人間への有益性”という新しい方向性があった、とおっしゃった。講演を拝聴できたこと自体も有意義であったが、博物学という科学的な概念を、言葉やそれを成立させた文化的背景から理解する過程を直接拝聴できたのは、歴史学の学際的な可能性を垣間見たという点できわめて刺激的であった。そうした意味では、タレイラシェヴィエルマもまた、同一の経験を与えてくれたといえよう。それは本書が執筆された経緯についても同様である。

タレイラシェヴィエルマはトゥールーズ大学の英文学教授である。彼女は2008年から2013年までの間の5年間、トゥールーズ大学の英文学研究センターとトゥールーズ自然史博物館の共同で行われた学際的なプロジェクト、EXPLORAの中核を担ってきた。EXPLORAでは、科学と芸術という双領域の相互関係の調査を目標に、多分野の研究者が招集された。本書は、この5年間の活動の集大成として出版されたものである。こうした大規模の学際的な取り組みと、その成果を目の当たりにすることもまた、研究者を志し始めたばかりの私にとって、きわめて刺激的であった。

それでは内容の紹介に入っていこう。冒頭で述べたように本書の最終的な目的は、科学と文学という双領域の相互作用の探求であるが、本書の序章ではそれ以上に、ヴィクトリア朝期、特に1860年以降の時代において、博物学とフェアリーテール、及びフェアリーを結びつける重要性が強調されている。この1860年とは、チャールズ・ダーウィン(Charles Darwin, 1809 - 82)の『種の起源』(*On the Origin of Species by Means of Natural Selection*, 1859年)が出版された翌年を意味する。詳細は後述するが『種の起源』の出版は、ヴィクトリア朝の人々の「自然」の概念に対して強い衝撃を与えた。著者によれば、この時代のフェアリーテールは進展し続ける博物学の影響を常に受けており、自然観に対するこの時代の議論を集約していた。またフェアリーテールも、新しい自然観の形成に影響を与えていた。(PP.2 - 7.)ゆえに、この時代のフェアリーテールを~~読む~~ことは、自然観の変遷を~~読む~~ことに等しいのである。

ヴィクトリア朝文化におけるフェアリーの重要性の議論、及びヴィクトリア朝の人々の博物学とフェアリーに対する強い関心を引き付けること自体は何も新しい考えではない。本書の執筆にあたって、著者は先行研究に次の2著を挙げている。キャロル・シルバーの *Strange and Secret Peoples: Fairy and Victorian Consciousness* (1999) とニコラ・ボウンの *Fairies in Nineteenth-Century Art and Literature* (2001) である。ヴィクトリア朝期のブルジョアにとって、博物学は、昆虫採集や植物採集といった流行のアクティビティであった。また彼らは、前時代や後世の人々と比較すると、フェアリーテールによく精通していた。シルバーとボウンによれば、ヴィクトリア朝の人々にとって、フェアリーといった超自然的なものを知ることと、未だ人間に知られていない未知の生物や植物を採集、分類し、展示することは、どちらも同様に興味をそそられることであった。確かに、自然界の神秘を探究し秩序づけようとするヴィクトリア朝の人々の行為は、超自然的な存在であるフェアリーを求めるとある意味では共通している。著者はこのようなフェアリーの重要性を博物学に限定して論じることで、両者の議論をさらに発展させた。

本書は7章で構成されているが、その内容は3分類できるのではなかろうか。第一は、1860年代以降の博物学とフェアリーテールの相互作用の提示で、1、2章が該当する。1章ではチャールズ・キングズリー (Charles Kingsley, 1819-75) の『水の子どもたち—陸の子のためのおとぎ話』(*The Water-Babies: A Fairy Tale for a Land Baby*, 1863) が、2章ではアラベラ・バックリィ (Arabella Buckley, 1840-1929) の『科学における妖精の世界』(*The Fairy-Land of Science*, 1879) が主に取り上げられている。第二は、ヴィクトリア朝期の自然観における女性性の考察で、3、4、5章が該当する。3章ではメアリー・ド・モーガン (Mary de Morgan, 1850 - 1907) の『おもちゃのおひめさま』(*A Toy Princess*, 1877) が、4章ではアン・サッカレー・リッチー (Anne Thackeray Ritchie, 1837-1919) の『シンデレラ』(*Cinderella*, 1868) が、5章では同じアン・サッカレー・リッチーの『赤ずきん』(*Little Red Riding Hood*, 1868) とハリエット・チャイルドペンバートン (Harriet, Child-Pemberton, 1873-1904) の『全て私のしたこと、あるいは赤ずきん再び』(*All my Doing: or Red Riding Hood Over Again*,

1882)が、主に取り上げられている。第三は、ヴィクトリア朝末からエドワード朝初期の作品にみられる自然と人間の関係性の探求で、6、7章が該当する。6章ではメアリー・ルーザー・モルズワース(Mary Louisa Molesworth, 1839-1921)の『クリスマスツリーランド』(*Christmas-Tree Land*, 1884)が、7章ではイーディス・ネズビット(Edith Nesbit, 1858-1924)の『砂の妖精』(*Five Children and It*, 1902)が主に取り上げられている。先述した『種の起源』による衝撃と特に関連している部分は第一、第二である。

『種の起源』の出版は、ヴィクトリア朝の人々にとってセンセーショナルであったが、とりわけ博物学においては、従来のキリスト教的な自然観を根底から覆す衝撃的な出来事となった。この衝撃は二分化される。1つは神による完全な世界の創造の否定である。キリスト教的自然観では、全ての生き物が神によって完全な姿に作られたと考えられており、各個体の変異に焦点が当たることは無かった。しかし、自然淘汰による変異の遺伝、進化が証明されたことにより、自然は、不変的なものから、状況に応じて姿を変化させていく、捉えどころのないものとなった。この姿を変化させるという点こそが、自然とフェアリーの共通点である。超自然的な力によって様々な姿に変わることが可能なフェアリーは、新しい自然観を分かりやすく体現するにあたって、視覚的な面も含め、まさに最適な存在であった。このようにしてフェアリーは、自然をイメージ化するためのツールとして、博物学の分野で重宝されるようになった。

さらなる衝撃は、人間を動物や植物と同列に位置づけたことである。これは、自然の概念に人間が加わったことを意味している。著者は、19世紀の博物学が今日の人間性の基板であると主張し、この時代の自然観における人間の概念を解読することは、人間とは何かという根源的な問いの検討にもつながると述べた。この検討において著者は、特に女性に焦点を当てて分析を試みた。その背景には、ヴィクトリア朝期の女性が、博物学とフェアリーテール両方のジャンルの作品において重要な位置を占めていたことがあった。本書のオリジナリティは、分析の対象が子ども向けの作品に限定されている点である。これは、より女性作家に特化したラインナップを作りあげることが可能にした。その範囲は、フィクションからノン

フィクション、また現在でも著名な作品から今日ではほとんど知られていない作品まで幅広く、これもまた本書の特筆すべきオリジナルな点である。

特に興味深いのは、ヴィクトリア朝期に再話されたフェアリーテールのヒロイン像から、同時代の女性像をみた4、5章である。伝統的なフェアリーテールにおけるヒロインの冒険は、若い少女が成長し女性へと変わる図を描いている。著者によれば、一部の女性作家にとって、ヴィクトリア朝期の価値観に基づいてフェアリーテールを再話することは、自然における女性性にアプローチする有効な手段でもあった。

3章のメアリー・ド・モーガンの『おもちゃのおひめさま』の分析も、自然と人間の関係をヒロイン像から考察するという点で、非常に面白い。『おもちゃのおひめさま』は、感情を表に出すことを無作法とする国に生まれた感情豊かなお姫様が、母親の名付け親の妖精にもらった、簡単な受け答えができる自分そっくりの人形と入れ替わる物語である。物語は、国民が本物のお姫様ではなく人形のお姫様を世継ぎに選んだために、お姫様が晴れて自由の身となるところで幕を閉じる。この作品は、一般にはヴィクトリア朝期の女性の礼儀作法を風刺し、皮肉ったものと解釈されることが多いが、著者は、本作を、フェアリーテールを用いて人間の自然性と産業主義との対立を描いた作品と位置づけた。フェアリーテールにおいて変身は重要な意味をもつが、この作品における変身は、ロボットとの入れ替わり一つまり一種の機械化である。著者はこの点に着目し、モーガンは本作において、自然性をコントロールすることはやがて人間そのものを機械化することにつながると警鐘を鳴らし、科学や技術の進歩に対するこの時代の人々の不安を表した、と主張した。

個人的に関心が高いのは、第1章のキングズリーの『水の子どもたち』に関する箇所である。『水の子どもたち』が、キリスト教社会主義の文脈で進化論を取り扱った作品であるために、宗教的な面でも、科学的な面でも、矛盾を抱えていることはすでに自明である。著者は、この作品とそれまでの著名な科学本を比較することで、『水の子どもたち』がその矛盾を含めて、自然界に対するロマン主義的な理解がよりヴィクトリア朝的価値観へ変遷する典型だと結論づけた。また著者は、キングズリーが用いた挿

絵のインパクトの強さにも言及し、このようなイラストを文芸シーンに持ち込んだ点でもこの作品は際立っていると評価した。確かに、真っ黒な姿をした煙突掃除の少年のトムが自分の汚れを洗い流し、まっしろな水の子どもへと生まれ変わるシーンはまさに物語のクライマックスであるが、その衝撃をよりドラマチックに演出した立役者として、イラストの功績は大きい。

本書の惜しむらくは、図版が全く使用されていない点である。表紙にはアンドリュー・ラング (Andrew Lang, 1844-1920) の『いないいない姫』 (*The Princess Nobody or A Tale of Fairyland*, 1884) の絵が使用されているが、本文中には1枚も図版が挿入されていない。もちろん、著者がレトリックに焦点を当てたかったことは承知の上だが、イラスト等にも言及しているのであれば、やはり図版が欲しかった。それゆえに、この本を読む際には、ぜひ『妖精百科』のような本を傍らに用意して読み進めることを、おすすめしたい。